

「見栄をかなぐり捨てて」 (要旨)
聖書箇所：マルコ 10:46-52, マタイ 5:6

【1】 義に飢え渴く者

山上の説教の幸いシリーズの4回目、今朝は「義に飢え渴く者は幸い」(5)についてです。この「義に飢え渴く」とは、神との正しい関係に生きたいと願う飢え渴きです。

私たち人間は飢えや渴きを覚えます。どんなに幼い子であってもお腹が空けば食物を求めます。空腹には食物、喉の渴きには飲み物を欲します。しかし渴くのは私たちの身体だけではありません。「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように神よ 私のためはあなたを慕いあえぎます。私のためは 神を 生ける神を求めて 渴いています…」(詩篇 42:1-2) 私たちの「たましい」の渴きは「生ける神」によってのみ充足するのです。主イエスは、神と正しい関係に生きたいと願う義に飢え渴く者は幸いだと教えました。

【2】 バルティマイの叫び

エリコに到着したイエスに「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください」(47)と叫んだのがバルティマイでした。イエスの弟子は彼をたしなめました。「ダビデの子のイエス様」と叫ぶことをやめさせるためでした。

人は自分の願い通りに物事を動かす自信がある時は叫びません。しかし「物乞い」バルティマイは違いました。彼は自分が自由にイエスの後について行くことができないことを知っていました。そのためイエスに立ち止まってもらおうと叫びました。一方、多くの群衆はイエスと行動を共にすることができました。物乞いのように「私をあわれんでください」と叫ばなくても、イエスと出会うことができると考えていたでしょう。しかしこの直後、主イエスは捕らえられ十字架にかけられました。結局バルティマイが自分に与えられたイエスとの出会いを逃さなかったのです。

【3】 たましいの飢え渴きを満たすもの

エリコの町はエルサレムに向かう途中の通過地点でした(マルコ 10:32)。イエスはエリコに到着する直前、弟子たちに、ご自分の受難と復活

を予告しました。主イエスがエルサレムに向かったのは、全ての人の罪のために十字架に架かって死に、三日目によみがえるためであったのです。それは、人の罪の結果、神と人の関係が損なわれてしまったからでした。イエスをご自分を信じる者が、罪赦され、神に義と認められ、永遠のいのちを受け継ぐことができるように、すなわち神と正しい関係に生きることができるよう、エルサレムに向かわれたのでした。

そうしたイエスの姿に、弟子たちは驚き、恐れを覚えました。けれどもこの時弟子たちはイエスが語られたことの意味を悟ってはいませんでした(参照:10:35-45)。

さてイエスとバルティマイとの出会いはそうしたエルサレムへの道の終盤の出来事でした。バルティマイは弟子たちの目から見て部外者でした。ところがそのバルティマイが「ダビデの子のイエス様、すなわち目の前にいるイエスこそ救い主だと言いつたのでした。彼は自分が救い主を必要としていることを認めていました。そのため見栄をかなぐり捨てて、「私をあわれんでください」と叫びました。イエスは彼を呼び、見えるようにしていただきました。イエスと出会ったバルティマイは自分が神によって生かされていることを知りました。彼は十字架に向かうイエスについて行く者とされました。すなわち神と正しい関係に生きる者とされました。

「あなたは私たちをあなたに向けてつくられたので、私たちの心は、あなたのうちにいこうまで安らぎを得ない」(アウグスティヌス『告白』)。

▷あなたのたましいの飢え渴きを真に満たすことができるのは「生ける神」なのです。

